

はしがき

財界主導で行われている今般の社会福祉「改革」は、一層加速度を増して進められている。当該「改革」においては、経営主体の多様化をはじめとする福祉市場の拡大が主眼とされており、ともすれば社会福祉事業の形骸化、あるいは接客ビジネスとボランティア活動への解消を招きかねない。

今、まさに、社会福祉事業とは何か、社会福祉事業はどうあるべきかが問われている。

本研究は、これらの問いに答えること、そしてその実現に求められる法的課題を明らかにすることを目的とする。そのために、まず社会福祉事業の変遷過程を社会事業法から辿る。そして、社会福祉事業の現状とそのルーツを明らかにした上で、今後の課題を提示する。

序章では、あらためて本研究の目的、意義を述べる。そして本研究の対象である「社会福祉事業」を確認した上で、7つの構成要素と4つの背景を分析枠組みとして提示する。また社会福祉事業の成立・変容過程を5期に区分することを述べる。

第1章から第5章では、各時期において、7つの構成要素が、いかなる背景によっていかに変容したのかを明らかにする。

終章では、第1章から第5章を踏まえ、構成要素ごとにその変容過程を再確認し、そのルーツを明らかにする。そして、社会福祉事業のあり方を提示し、その具現化に求められる課題を提起する。

社会福祉事業とは何か、どうあるべきかという壮大なテーマに対し、本研究が応え得るのはほんの一部に過ぎない。しかし、上記のような矢継ぎ早の「改革」が断行される状況において、そしてテーマが拡張化・ミクロ化・断片化している昨今の社会福祉学における研究動向において、史的変遷を踏まえつつ社会福祉事業全体を俯瞰しようとする本研究は、一定の価値を有すると考える。また、本研究が社会福祉事業に関する研究の必要性を喚起するならば、社会福祉学への幾ばくかの貢献になるだろう。